

雜 錄

ソヴェート聯邦に於ける製鐵業の發展 ソヴェート聯邦に於ける製鐵業發展の誘因が大戦前の帝政時代と大戦後の革命政府の時代との間に大に其の趣を異にするものあるは特に注目すべき點である。即ち、大戦前に在りては鐵道建設の鐵類需要が國內製鐵業の發展を齎したるに對し、戦後ソ聯邦の製鐵業を動かせるものは所謂計畫經濟に依る建設事業の進展並に軍需工業の盛況に基くものである。1929年、1930年の兩年を経て始めてソ聯邦の製鐵業は戦前の水準に復することを得たるも、その後に至り軍需資材の需要旺盛と一般工業化過程の進展とに依りソ聯邦製鐵業の發展は愈々顯著となり來つた。茲にソ聯邦製鐵業の發展の跡を顧みるに當り、先づ其の據つて立つ所の自然的條件に就て一言したい。

自然的條件 ソ聯邦は、周知の如く、歐、亞の兩地に跨り、風俗、言語、習慣を異にする各種民族を包擁し、1億4,000萬の人口を有する國家である。製鐵業の中心たる歐露並に亞細亞の廣大なる地域は何れも森林に覆はれ、早くより鐵鑛製錬に必要な木炭を供給してゐた。更に、此の國は各種の石炭及鐵鑛に富み、殊に石炭埋藏量は全聯邦に於て7,000億噸に上ると推定されてゐる（註一合衆國の石炭埋藏量30,700億噸、加奈陀の同埋藏量10,230億噸である）。

石炭埋藏量の豊富なる西部及東部西比利亞とドネツ盆地である。之に比すれば、カザクスタン、モスコフ及ウラルの各地方に於ける埋藏量は豊富ではない。従來、冶金上必要とする石炭は主としてドネツ地方と西部西比利亞のクズネツ盆地（推定埋藏量4,000億噸以上）である。後者の地方より産出する石炭の成分は灰分及硫黄の含有少きため、鐵鑛製錬に特に適してゐる。最近に於けるドネツの骸炭産量は總産額の60%をも占めてゐる。

ソヴェート聯邦は鐵鑛にも富んでゐる。最近の調査に依れば、ソヴェート聯邦の鐵鑛埋藏量は他の何れの國を6凌駕してゐる。

第1表 ソヴェート聯邦の鐵鑛埋藏量

地 區	鐵鑛埋藏量 (單位100萬噸)	主要鐵石	鐵分含有率 (%)
クリヴオイ・ローク (ウクライナ)	1,200	赤 鐵 鑛	60~70
ケルチ(黒海)	2,700	褐 鐵 鑛	30~40
ツラ・リベツク (モスコフ南部)	1,400	同 前	30~40
クルスク(中央ロシア)	300	赤 鐵 鑛	55~67
ウラル各地方	700	混合鐵鑛	30~60
バカル(中央ウラル)	100	褐 鐵 鑛	45~52
マグニトゴロスク (南部ウラル)	400	赤 鐵 鑛 褐 鐵 鑛	40
クズネツ(中央シベリア)	400	磁 鐵 鑛	40
	1,500	混合鐵鑛	35~60
其の他共計	9,200		

前掲表に示す如く、總埋藏量は92億噸に達し、此の約15億噸は高品位の鑛にして、採鑛容易なりと言はれる。之に對し、合衆國は高品位の鑛にして採鑛容易なるもの50億噸以上なりと推定されてゐる。ソ聯邦の製鐵業にとり最も著明なる鑛區としてはウクライナ地方のクリヴオイ・ローク鑛山、ウラル地方の鑛區がある。此の地方に於ては、北部にクチム及ユブルシユキン鑛山、南部のストラタウスク地方のバカル鑛床、更に60%の品位を有するマグニトナア鑛床がある。又、中部ロシアの所謂トランス・モスコフの鐵鑛區（此處にはツラ鑛山がある）とクリミア半島のケルチ鑛山があつて、

製鐵業にとり主要なる鐵鑛産地をなしてゐる。最近、西比利亞のシヨリア高地に在るテルベス・テルミルタウ鑛區も大に注目されてゐる。コウカサスのチアトリイ及南ロシアのドニエプル在のニコポールに賦存するマンガン鑛床は國內のみならず、世界市場に於て大きな役割を演ずるものと言はれてゐる。

經濟的發展 19世紀來、ロシアも交通機關の發達、新興都市の發展、工業化の促進により鐵の需要は激増し、爲にロシアに於ても西歐諸國と同様に舊式の木炭製錬法を採用せざるに至つた。當時の製鐵業發達の急速なりしは、勿論、外國、殊に英吉利資本の援助に依る所大であつた。1890年後には佛蘭西資本、白耳義資本、獨逸資本も亦ロシア製鐵業に参加するに至つた。西比利亞鐵道の建設、西部國境に於ける戰略上必要な路線の設置は鐵材の需要を喚起し、勢ひ製鐵所の新設擴張を齎した。政府も製鐵所建設に補助金を下附し、『操業信用』をも賦與した。

西比利亞に於ては1893年4つの製鐵所新設を見、うち2つは夫々アルタイ地方のグレイエヴスキイとトランス・バイカル地方のペトロフスキイに新設された。イエニセイスク政廳管區のアバコフスキイ及イルクーツク政廳管區のニコライエフスキイには2つの私營製鐵所が操業してゐた。同じく1890年の交、アゾフ海の沿岸に製鐵所が建設され、ケルチの褐鐵鑛とドネツ地方の石炭の供給を受けた。タンガロークではマリヌポール鐵管・鐵板製造工場が操業して居り、更に1896~97年の交にはベテロフスキイ工場建設され、1899年には白耳義のプロヴィダンス製鐵會社によりケルチに製鐵所が建設された。

以上の如き新設製鐵所の増加に依り、南ロシアの銑鐵産額は1890年より1899年までに約22萬噸より126萬噸に増加した。従つて此の地方の銑鐵産額は全露銑鐵産額の40%を占めるに至り、既に1895年に於てウラル地方の銑鐵産額を追い越すに至つた。大戦前まで南ロシアの製鐵業は良好なる發達を遂げ、1913年には全露銑鐵産額463萬噸のうち67%を占めるに至つた。之に反しウラル地方の産額は同じ年に僅に19%を供給したに止つた。之に應じて銅塊の産額は440萬噸のうち南ロシアの産額は63.4%の多きを占めてゐる。之に次で、ウラル地方20.4%、モスカウ地方10.2%、レニングラード地方6%であつた。

戦時中にはロシアの銑鐵並に銅塊の生産は石炭其他原料の缺乏殊に交通機關の混亂のために減退し、1917年の革命後もロシア製鐵業の大部分は長期に亘り操業を停止してゐた。而して大戦の結果として戦前製鐵業の略1/6を喪失せるも、これはポーランドを始め邊疆諸國の獨立による永續的な喪失であつた。

革命の結果全露の鑛産及工業的施設は擧げて國有に歸し、製鐵業の管理及責任も亦國家に移管されるに至つた。然るに大戦に因る製鐵業の混亂は1918~20年にその極に達するに至り、爲に製鐵業の完成乃至改組計畫樹立され、鐵鑛、石炭、銅塊、機械等の各製造品目別に工業を總括し、之を地域的に編成せんと努力するに至つた。然し乍ら之等同種經濟部門の合併を計らんとすれば、勢ひ過大なる管理企業を生じ、各統制工業部門に紛議を生ずるに至つたので、政府は此の計畫を排して新經濟政策(ネツプ)の實施を公布し、相互依存的關係に在る工業及經濟部門の『有機的結合』を行はんとするに至

つた。斯る方法に依り、例へば各鐵鑛々區と石炭鑛區とはトラスト及綜合結合體に分ち、各部門間の協力を行ふことゝなつた。

1,923年當時には未だ國有に移管されたる製造施設は僅少なりしたため、その産額は1,913年に比し遙に低き水準に在つた。即ち石炭採掘高はその40%、鐵鑛採掘高はその4%、銑鐵産額はその65%、鋼塊産額はその13%に過ぎなかつた。従つて之等生産の状況より言へばソヴェート聯邦の1,923年に於ける生産水準は1870年當時に逆轉したのである。當局は大戦後の苦い経験と組織上の失敗に徴して經濟的建設に必要な製鐵業をして良好なる指導と充分なる給付能力を得せしむるための方策を設定した。即ち、1,923年以降當局の努力は國防、交通制度の整備、共同經濟の完成に必要な製鐵業の復興に向けられ、先づ休止せる舊設工場の改修とその再開を計つた。斯くして冶金業の生産額は1,923年以降徐々にてはあつたが、漸次増加の傾向を示すに至つた。殊に1925~26年以來は中部ロシアに於ける新設工場も擴張され、1,928~30年の交には生産額は再び大戦前の水準を回復するに至つた。計畫經濟の國に於ても此の如き石炭、銑鐵、鋼塊等の生産回復は一朝一夕に實現されたものではない。

第2表 1870~1934年に於けるソヴェート聯邦(ロシア)の鐵山及製鐵業(1) (單位100萬噸)

年次	石炭産額	コークス産額	鐵鑛採掘高	銑鐵産額	鋼塊産額(鋼鑄物を含む)	歴延工場に於ける歴延鋼材産額
1870年	0.69	—	0.80	0.36	0.009	0.58
1880年	3.29	—	1.02	0.45	0.30	0.58
1890年	6.14	—	1.83	0.93	0.38	0.97
1900年	16.2	—	6.11	2.89	2.22	2.20
1910年	23.1	—	5.76	3.04	3.48	3.48
1913年	29.98	4.4	9.53	4.63	4.44	4.01
1923年	10.57	0.4	0.40	0.30	0.59	0.55
1924年	14.65	0.7	0.87	0.65	0.99	0.68
1925年	14.97	1.4	2.10	2.20	1.88	1.38
1926年	23.46	2.8	3.43	2.35	2.91	2.68
1927年	29.85	3.4	4.81	3.05	3.59	2.73
1928年	23.87	4.0	5.92	3.20	4.15	3.29
1929年	36.86	4.7	7.65	4.02	4.72	3.87
1930年	48.56	6.2	10.43	4.98	5.55	4.60
1931年	55.60	6.8	10.61	4.86	5.42	4.05
1932年	60.00	8.2	12.20	6.20	5.90	4.2
1933年	70.70	10.2	15.10	7.11	6.85	4.8
1934年	92.20	14.2	21.70	10.44	9.57	7.0

註 (1) ルードウィツヒ・ベツク博士、『技術及文化より見たる鐵の歴史』に據る。

(2) 1923年より1929年に至る經濟年度は9月30日に終る。

第2表の示す様に、1927年即ちソヴェート政權の樹立以來10年にして漸く石炭採掘高は大戦前の水準に達した。1933年以降の第二次5ヶ年計畫に於ては既掘鑛區の能力擴張の外に新鑛區の開発も行はれる豫定である。此の點に關しソヴェート聯邦は西比利亞石炭鑛區の開発に特に注目してゐる。比較的小部分の工業地域の開発が一應完成されるや、更に全國土に亘る工業化を行はんと努力してゐる。之に應じて工業化の基本資源たる石炭も新鑛區の開発に仰がんとし、他方之が運輸系統の整備も立案實施されんとしてゐる。

鐵鑛々區に於ても同様の發展を見、鐵鑛石産額も1930年に始めて戦前の水準に回復し、1934年には2,170萬噸、即ち1913年の産額の227.7%に及んだ。地域的にその産額を見れば、ウラル地方は1913年に全産額の18%を、又、ウクライナ地方は65%を占めてゐたが、1928年には夫々19及75%となつた。ソヴェート

聯邦の着手せる西部西比利亞に於ける工業化計畫は先づ埋藏量豊富にして採掘容易なる石炭鑛區を基準として實施された。クズネツツ冶金工場は勿論此處より2,400k m.以上の距離に在るマグネトゴスクより出づるウラル鐵鑛を取得する爲に此處に産する石炭と交換する必要を生じ、以上よりも近距離に鐵鑛々區を探求してゐるが、既に大戦前テルベス鑛區は判明してゐた。1930年夏季、クズネスク附近に於て試掘が行はれ、シヨリヤア高地にチタン・磁鐵鑛々區の大なるもの存すること判明した。此の新鑛區の開発を見れば、クズネツツ冶金工場への鐵鑛供給は改善されることとならう。第二次5ヶ年計畫によりクズネツツ地方には以上の外に第2冶金工場の建設が計畫され、第1工場(スターリン工場)と同様に、同新設工場の鐵鑛需要の60%はマグネトゴスクより、40%はテルベス〜テルミルタウより供給さるゝ豫定である。

最後にソヴェート聯邦のマンガン鑛區に就て一言するの必要があるが、鑛區としてはコーカサスのチアツリイ及ドニエブルのニコポールが稼行されてゐる。戦前より1933年に至るソヴェート聯邦に於けるマンガン鑛の採掘状況は次表の如くである。

年次	總産額(噸)	チアツリイ鑛區(噸)	ニコポール鑛區其他(噸)
1913年	1,245,300	970,000	275,300
1929年	1,183,900	584,900	599,000
1930年	1,444,200	880,600	563,600
1931年	885,000	308,900	576,100
1932年	826,000	297,500	528,500
1933年	898,000	534,000	364,000

ソヴェート聯邦に於ては之に示す如くマンガン鑛の産額増加著しからざるを以て、ニコポール鑛區の産額は比較的重要性を示すに至つた。コーカサス地方のマンガン鑛産額は大部分戦前と同様に戦後も輸出されてゐる。之に對し、ニコポール鑛區の産額はその1/4が輸出に向けられたに過ぎず、この産額の大部分は鑛區附近の熔鑛爐用に供せられる。最近、チアツリイ鑛區の輸出量は減少したが、これは國內工場の需要増加に基因するものであつた。1932年末に至り始めてクズネツツ冶金工場にチアツリイ鑛が多量供給されたと言はれてゐる。1933年にはセンタフオニマンガン鑛製造工場の採業によりマンガン鑛の需要は更に増加した。今後更にマンガン鑛の國內消費は増加の傾向を示すであらう。

兎に角、ソヴェート聯邦は鐵鑛産出國としては合衆國及佛蘭西に次で世界第3位に在る。既に1931年英吉利は採掘高に於ては1931年にソヴェート聯邦に追ひ越されてしまつた。

銑鐵及粗鋼産額 東部に於ける既存並に新設の原料資源及加工々場の擴張及開發は主として同地方の工業化遂行に必要な資源の補給の爲なりと思考さるゝも、此の地方重工業の完成が急がるゝ所以は一面に軍事的見地も亦考慮されてゐる。各地の銑鐵及粗鋼生産(單位100萬噸)

種別	1913年	1929年	1930年	1931年	1932年	1933年	1934年
石炭	29.97	36.86	48.56	55.60	60.00	70.70	92.00
銑鐵	4.63	4.02	4.98	4.86	6.20	7.11	10.44
鋼塊	4.44	4.72	5.55	5.42	5.90	6.85	9.57
歴延工場鋼材	4.01	3.87	4.99	4.05	4.20	4.80	7.0

各年度100とする1934年度比率

(—譯註原數誤植の點あるを以て訂正せり)

種別	1913年	1929年	1932年(統制數字)
石炭	307.0%	249.6%	152.00%
銑鐵	225.5	259.7	18.00
鋼塊	215.5	202.8	19.00
歴延工場鋼材	174.6	180.9	14.00

に關する數字は遺憾ながら 1928 年までしか存しない（其の後公表されず）。第一次 5 ヶ年計畫及 1933 及 34 兩年度に於てソヴェート聯邦の石炭、銑鐵、鋼塊及壓延工場鋼材の各産額は前掲の如くである。

掲表に據れば、ソヴェート聯邦の鋼塊生産は 1929 年に、銑鐵の生産は 1930 年に 1913 年の水準に達した。此の場合注目すべきは、此の兩年度及 1931 年には鋼塊の産額に銑鐵産額を凌駕しむるも、この關係は 1913 年並に 1932、33 及 34 年の各年に於て全く反對となつてゐる。1930 年 銑鐵及鋼塊の生産は遂に増加したが、之と反對に鋼材の製造は充分なる發展を示さなかつた。而して 1929 年には再び 1913 年の水準に回復したが、其の後 4 ヶ年間に鋼材産額は約 100 萬噸だけ、即ち、漸く 25% の増加を見たるに過ぎなかつた。1931 年に生産は再び 1929 年の水準に下降し、1934 年に至り始めて 1913 年の生産水準を越えること漸く 67% に及んだ。然るに同じ期間に鋼塊生産の増加は 116% にして銑鐵の生産は 127% であつた。過ぐる經濟年度に於ては鋼塊と鋼材は數量的には著増を見たるも、此の増加程度は銑鐵生産の増加には遙に及ばなかつた。銑鐵の生産と鋼塊の生産との間に生じたる不均衡に就ては最近スターリンの公然之を認めたる所にして、彼は速かに此の弊を除去すべき旨強調してゐる。

要するに第二次 5 ヶ年計畫に於ける南ウラル及西部西比利亞に於ける工場、殊にマグネトゴロスク及クズネツツ冶金工場並に製鐵業に於ける各工場の顯著なる發展は石炭採掘業に於けると同様に、將來南ロシアよりウラル及シベリア方面に其の中心の移動を見るに至るだらう。

ソヴェート聯邦が特に西部西比利亞の工業化に盡力せることは第二次 5 ヶ年計畫にウラル＝クズネスク『結合體』建設のため巨額の豫算を計上することからも知られる。此の地方の工業化の爲に第二次 5 ヶ年計畫はその投下資本の 1/4 を充當して居り、之は重工業投下資本の約 1/2 に相當する。第二次 5 ヶ年計畫完了の曉には、此の地方は黑色金屬總産額の 1/2、石炭採掘高の 1/4、電力源の 1/2、機械製造の 1/2 を占めるに至ると言はれてゐる。

既に第一次 5 ヶ年計畫に於ては工業建設に投下せる資本の主たる部分は生産財工業に屬するものであつた。之に對し第二次 5 ヶ年計畫も亦總投資額 695 億留に達し、此の中 534 億留、即ち 76.8% は生産財工業に關するものにして、その大部分は西部西比利亞の製鐵業に投下される豫定であると言ふ。

モロトフ及グワイシエフの報告に依れば、ソヴェート聯邦は第一次及第二次 5 ヶ年計畫に關し次の如き數字を發表してゐる。

(單位 10 億留)

		第一次 5 ヶ年計畫 (1928~1932年)	第二次 5 ヶ年計畫 (1933~1937年)	總計
經	濟	50.5	133.4	183.9
内	工 業	25.0	69.5	94.5
	農 業	9.7	15.2	24.9
	交通業	8.9	26.3	35.2
社	會 費	26.0	80.0	106.0
行	政費、軍備費	41.5	116.6	158.1
其	の 他			

前表より明かなる如く、ソヴェート聯邦は廣大なる領土の遠隔地方を空襲より防護するため、如何に之等地域の工業化に努力しつゝあるかを認めることを得る。

ソヴェート聯邦は銑鐵生産 (1934 年度) に於ては獨逸の 1,060 萬噸と共に歐洲の首位に在り、鋼塊に於てはその産額は獨逸に次ぐ第

2 位に在る。世界に於てもソヴェート聯邦は銑鐵及鋼塊の生産に於て合衆國及獨逸に次ぐ第 3 位に和る。冶金工場製品産額も亦世界第 3 位を占むる。最後に注目すべきは、ソヴェート聯邦の積極の方策により此の國の外國資源よりの獨立は益々顯著となりつゝあり、殊に高級鋼の生産増加は顯著なる成功を示せることは、次表の如くである。(單位=噸)

年 次	高級鋼 内	球 軸 承 用 鋼	オート・ プレス鋼	耐 熱 鋼
1931 年	420,000 噸	300 噸	8,900 噸	9 噸
1933 年	890,000 "	16,400 "	17,500 "	750 "
1934 年	1,250,000 "	49,000 "	30,000 "	1,500 "

1934 年に於ける冶金工場總産額の約 19% は高級鋼であつた。ソヴェート聯邦の報告に依れば、1939 年に於ても尙重工業の建設に重點を置く筈である。之に對し輕工業に於ける生産の増加率は僅に 11.7% を豫定されてゐるに過ぎない。

大戰後發展の特殊性 概してソヴェート聯邦の冶金工業は戦前に比すれば顯著なる上昇的發展を示してゐる。即ち、ソヴェート聯邦の石炭、鐵礦、銑鐵、鋼塊の産額は戦前に比すれば世界生産に占むる地位は上昇してゐる。試みに石炭、鐵礦石、銑鐵及鋼塊の各

	1913 年 %	1923 年 %	1933 年 %	世界産額を 100 とす れば、ソヴェート 聯邦は左表の通りで ある。
石炭採掘高	2.24	0.78	6.09	
鐵礦石採掘高	5.35	0.29	16.96	
銑 鐵 産 額	5.86	0.43	14.69	
鋼 塊 産 額	5.29	0.76	10.07	

ソヴェート聯邦の石炭及鐵礦石採掘高の世界總産額に占むる割合は 1913 年より 33 年に亘り略倍増してをり、銑鐵産額も亦著増し、鋼塊産額もその世界産額に對する割合は倍増してゐる。1934 年度には此の割合は更に増加するものと考へられる。此の事情を合衆國及獨逸と比較して示せば次表の如し。

第 3 表 合衆國、獨逸及ソヴェート聯邦に於ける採掘高及生産高 (單位 100 萬噸)

合 衆 國	1929 年	1931 年	1932 年	1933 年	1934 年	
	石炭採掘高	552.3	400.7	326.2	342.3	—
鐵礦石採掘高	74.2	31.6	10.0	17.8	25.3	
銑鐵生産高	43.3	18.7	8.9	13.6	16.5	
塊鋼生産高	57.3	26.4	13.9	23.6	25.8	
鋼材生産高	41.2	19.4	10.5	16.9	19.4	
獨 逸	1929 年	1931 年	1932 年	1933 年	1934 年	
	石炭採掘高	163.4	118.6	104.7	109.9	125.0
鐵礦石採掘高	6.4	2.6	1.3	2.6	—	
銑鐵生産高	13.4	6.1	3.9	5.3	8.7	
鋼塊生産高	16.0	8.2	5.6	7.6	11.9	
鋼材生産高	11.3	5.9	4.2	5.5	8.4	
ソヴェート聯邦	1929 年	1931 年	1932 年	1933 年	1934 年	
	石炭採掘高	41.7	53.5	64.2	76.7	96.0
	鐵礦石採掘高	7.6	10.6	12.2	15.1	21.7
	銑鐵生産高	4.0	4.9	6.2	7.2	10.5
	鋼塊生産高	4.7	5.4	5.8	6.9	9.6
	鋼材生産高	3.9	4.0	4.2	4.8	6.7

此の數字を點見すれば、今日經濟國たる國は凡て農業國より工業國に移るに當り工業的發展の極めて急速なりしを考慮しなければならぬ。然るにソヴェート聯邦は戦時及戦後の當初を通じて殆ど 10 ヶ年間は何等工業的發展を示さなかつた。相當長期に亘りソヴェート聯邦の冶金業を考察するならば、その最近の發展に於ては既に戦

前に有効に行はれた工業的發展を單に引繼いだ程度である様に思はれる。大戰後の發展を戦前の發展と比較するに、1890年代の帝政時代の上昇運動はソヴェート經濟時代に比し遙に著しかつたことは確である。大戰前の製鐵業は經濟的觀點、殊に収益原則に従はねばならなかつたから、原料、勞働力、交通、販賣の各方面より認めて有利なりとする場合に始めて着手されたのであつた。然るにソヴェート政府の治下に在りては新施設は多く政治的理由より建設されてゐる。其の最適の例は西部西比利亞である。西部西比利亞に於ける工業化の實施に際しては、其の原料たる鐵鑛石と石炭はアルタイ地方のクズネツツとウラルのマグネトゴロスとの間に相互に交換を行ふのであり、其の兩地間の距離は2,400kmに上り、クリミア半島とルール地方の間の距離に等しい。北米合衆國に於てさへ石炭又は鐵鑛を製鐵所に運搬する最長距離は約1,100kmにして、クズネツツ=マグネトゴロスク間の約半分に止る。ソヴェート聯邦の製鐵業が巨額の損失を示せるは此の如き原料輸送距離の長き爲のみならず、從來殆ど未開發の状態に在りし地方の特殊な季候的條件に依る所が大である。例へば西比利亞に於ては冬季期間長き爲、冶金・製鍊所に給水を行ふことは至難に屬する。此の困難を除去するには巨額の資本を要することは明かである。更に交通路、交通機關の不備のため屢々原料補給に支障を來し、全工場の操業休止を長期に亘り行ふの止むなき場合も生ずる。尙又、人的方面に於ても職工の技能的素質の劣悪、技師の不足のためにもこの様な事態の生ずることもある。此の如きは西歐或は北米の製鐵業に見られざる現象である。

ソヴェート聯邦の工業化は從來未開發状態に在りし地域に於て實施さるゝものであるから、他の經濟部門を犠牲にして、従つて國民一般の言ふべからざる犠牲に於てのみ實現され得た。而も斯く拙速的な工業化の行はれ得たる所以は土地を始め一切の生産手段を支配するソヴェート國家が國內市場を完全に支配し、外國貿易をも獨占して工業化實施に必要な商品のみを輸入せることに在る。

工業新設のためには鐵及鋼の巨大な需要が生ずるが、之は主として機械を始め交通機關並に工場、住宅の建設に必要な原料としてである。ソヴェート聯邦の工業化の開始された第一次5ヶ年計畫の初期には未だ鐵及鐵製品の輸入は戦前の水準に及ばなかつたが、1929年以降は鐵及鐵製品の輸入は次の第4表に示す如く巨額の數に達してゐる。1931年には鐵材の輸入數量は105萬噸以上に達し

たが、此の數字は同年度の伊太利、チエコスロヴァキア或はザール地方の鋼塊總産額より大であつた。然し乍ら1932年には鐵及鋼製品の對ソ輸入は再び減退した。その理由は世界市場の狹隘となれると、國際貿易商品價格の激落とに因り計畫的に行はるゝソヴェート聯邦の外國貿易が完全に齟齬を來したことに在る。之が爲に第一次5ヶ年計畫の遂行すら危くされるに至つた。ソヴェート聯邦の輸出も亦累年顯著なる減少を示し、1931年の17億5,700萬ライヒスマルクより1933年には9億9,200萬ライヒスマルクに及んだ。斯くの如く1932及33の兩年度に於ける輸出額の激減は輸入を抑へるに與る所大なりしとは言へ、他方、ソヴェート聯邦の製鐵業の生産増加は勿論此の減少に影響されてゐる。

前表に示せる各輸入製品の數量を大戰前と比較するに、銑鐵、鐵合金及半製品の輸入數量は戦前よりも遙に小となつてゐる。1913年に比して輸入減の最も著しきは主として鐵合金であり、銑鐵及半製品の輸入は此の年以降著しき増加を示してゐない。此の點に於てソヴェート聯邦は全體としてその需要を自給し得るに至つてゐる。最近高級鋼の産額著増を見たる事は將來鐵合金の輸入をも減少せしめるに至るであらう。1932及33の兩年度に於て特に顯著なるは高價なる製品、例へば或種の鐵管の如きの輸入は他の多量製品の輸入よりも良好なる状態に在る。1933年に於て無接合鐵管の輸入は再び著増した。かゝる事情は先づ鐵及鋼の多量製品の自給にソヴェート聯邦が如何に努力しつゝあるかの證左であるが、製造困難なる特殊製品は依然として輸入に俟たねばならぬ。

ソヴェート聯邦の製鐵業に於ては勞働者問題及原價、販賣價格、販賣に關する問題は西歐諸國或は北米合衆國とは全然異なる役割を演じてゐる。即ち、概言するとソヴェートの職工は従前他の職業に従事し居たる者の轉換せるものにして、その作業能率に於て西歐、北米の職工に比し遙に劣つてゐる。此の技能上の優劣は一面國民の性格に基くものであるが、他面、政府及其の黨が如何に勸告命令するとも早急に排除し難き特異性でもある。ソヴェート聯邦は比較的短期間に莫大なる犠牲を拂つて外國の援助の下に製造工場を新設することを得た。然しながら前述の如く優秀なる職工及技師を得て先進諸國を凌駕するに至るは容易のことではない。従つて工場設備の處理を誤り、機械に對する注意の不充分なるため操業上の障礙を醸し幾多の事故頻發せる點は屢々委員會の注意してゐる所である。

例へばソヴェート聯邦のシーメンズ・マルチン爐に就て見るに、その修繕から次の修繕までに60回乃至100回の出鋼を行ひ得るに過ぎないが、獨逸に於ては其の出鋼回数は此の數倍に上つてゐる。兎に角、ソヴェート聯邦は熟練工に不足を感じてゐるのみならず、勞働力自體の不足すら生じてゐるために、重工業に於てすら婦人勞働者が採用されて居る。かゝることは歐米に於て見ざる點である。婦人勞働者が重工業に何程採用されてゐるかと言ふに、1926年には總數の11.2%、1933年には26.9%に上つてゐる。熟練工の不足は生産過程の圓滿なる運轉を害しつゝ

第4表 鐵及鐵製品の對ソ聯邦輸入 (單位=噸)

年	鐵鋼屑	銑鐵、合金半製品	型、棒、平板鋼材	鐵、鋼線材	各種管類	鐵道用材	總計
1909年	—	—	39,554	2,403	4,011	185	46,153
1910年	—	—	40,455	2,771	5,360	365	48,951
1911年	—	—	44,197	2,370	7,302	308	54,177
1912年	—	103,289	74,751	5,205	10,705	3,556	197,506
1925~26年	—	6,846	46,926	8,018	14,525	331	76,646
1926~27年	—	33,389	43,907	7,629	29,333	156	114,414
1927~28年	—	7,598	105,587	6,303	73,227	797	193,512
1928~29年	—	12,624	236,716	9,870	32,693	771	292,674
1929年	4,841	12,714	271,090	10,801	17,328	1,884	318,658
1930年	6,125	17,812	640,003	15,751	39,636	3,393	662,749
1931年	15,539	99,180	1,184,263	37,471	114,265	125,968	1,566,686
1932年	2,095	12,645	852,740	19,689	59,673	26,016	972,856
1933年	7,776	31,254	437,433	437,433	6,537	90,191	630,044
1925年10月1日より1933年12月31日まで總計	36,376	334,062	3,818,665	552,965	387,217	249,507	4,801,241
年平均	7,275	26,007	424,296	61,440	43,024	27,723	533,471

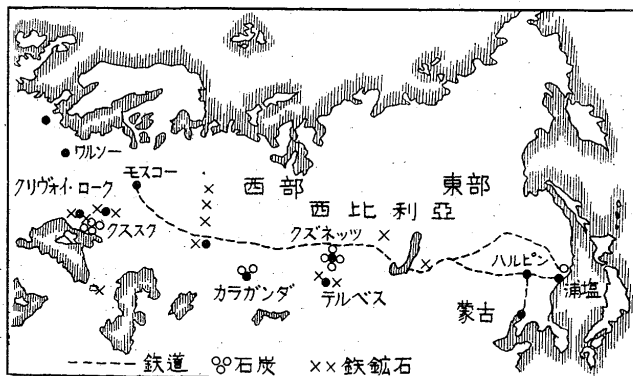
あることは注目の要がある。

重工業に於ける原價及販賣價格に就て、ソヴェート聯邦と歐米諸國とを比較することは労働力の場合に比し遙に困難である。西歐諸國に於ては製鐵業は經濟原則に従ひ經營され、販賣も原料補給も完備せる交通手段によつて廉價に供給取得することを得るも、ソヴェート聯邦に在りては其の領域廣大なるため遠距離輸送が必要であり、加ふるに交通機關の舊式或は不備のため西歐諸國に比し極めて不利の立場に在る。従つてソヴェート聯邦の製鐵業に於てはその原價は西歐又は合衆國に比し著しく割高である。製品價格を決定する要素は工場用原料費、運賃、労銀であるが、ソヴェート聯邦では之等の要素に依る資本主義的な原價計算に従はざる點に於て他の諸國と特異なる事情が存する。之に加ふるに、留貨に關しては第一次5ヶ年計畫着手以降巨額の國內公債募集のために好都合な統計を作成してゐるが、實際には留貨は價值通りではなかつた。例へば5ヶ年計畫遂行中に賃銀は引上げられたけれども、その半面に主要生活必需品の價格、例へばパン用裸麥の如きは1kg當り110留(=2.30ライヒスマルク)にして比較的割高である。然るに農民はその産出せる裸麥は小麦引渡義務により舊來の値段、即ちドツペルツェントナー(120kg)當り415乃至625留にて引渡すのであるから、政府は莫大なる利益をあげることが出来る。この利益は勿論工業建設計畫に充當されてゐる。斯くの如く生活必需品の價格は割高なるに反し、俸給及賃銀は平均して今日略150留である。然もこの所得の一部は強制的に建設計畫遂行の爲に公債に應募せしめられてゐる。

ソヴェート聯邦の自供自足の努力と共に、今日その經濟的發展が如何なる成果を齎したるかと言ふに、この經濟的實驗は草案者の豫想とは全く似てもつかぬものとなつてゐる。膨大なる工場は建設され、製品の産額も外國の援助に依り増大してはゐるが、かゝる建設事業は凡て國民の言ふべからざる犠牲の下に遂行されてゐる。貨幣なき經濟を信じてゐたソヴェート政府の初期に於ける無秩序な經濟關係が漸く排されて、漸次、從來共產主義的専門家の立案とは殆ど無關係な、然も歐洲の經濟事情からは夢想だに出来ない經濟方式が行はれつゝある。製鐵業に於ては此の方式が目下實驗されてゐる。

最近に於けるソヴェート聯邦の計畫は東部西比利亞、特に滿洲國の北境に關して樹立され、此の地域に工業を創設して西部西比利亞及外國との從來の依存關係を獨立せしめんとしてゐる。此處に於ても西部西比利亞の開発に於けると同様、重工業の建設が勿論重視されてゐる。極東に於ける新興工業地域はバイカル湖より太平洋岸に至る數100kmに亘り西比利亞横斷鐵道の北側に建設さるゝ鐵道を通じて中央亞細亞と連結される豫定である。本鐵道はザイア及ブレイアの兩河水源地方を経て、黒龍江に臨みハバロフスクの北方100km

ソヴェート聯邦に於ける主要炭鐵及鐵鑛鑛區所在



の沿海州に新に建設さるべき都市コンソモルスク (Konsomolsk) に至る筈である。東部に於ては前記諸都市を結ぶ鐵道により西比利亞鐵道との連絡が行はれる豫定であると言ふ。尙、各工業都市はバイカル湖=コンソモルスク鐵道に支線によりて連結される計畫である。滿洲に於ける日本の進出の爲に、かゝる新計畫の實施が急速に行はれるべきことは容易に認められる。

最近に於ける前述の如き開發事業の爲に、ソヴェート聯邦の經濟方式が將來影響を蒙るべきことは考へ得られる所である。ロシアは西歐諸國に比すれば依然としてその開發状態は遅れて居り、ピーター大帝の時代から此の國經濟に對する國家の干與は顯著であつた。今後政治形態が如何に變更されるとしても、經過過程に國家權力の著しき干與を見るべきは吾人の疑はざる點である。

最近の各般の状勢より察して、ソヴェート聯邦は次の時代に於て西比利亞開發に全力を傾倒し、之がため西歐方面の開發が一時停止さるゝことゝならう。従つてソヴェート聯邦は交通の整備を計る爲に依然として特殊機械鐵道用品の購入を必要とするだらう。然し購入國としての重要性は、此の國內工業の發展を顧みれば餘りに高く評價することは許されない。或は、1934年に鐵道の白耳義及日本へ輸出されたる事實を指摘してこの反證となす人があるかも知れぬが、之は此の國の冶金工場が銹鐵の急増に對し應じ切れなかつたといふ事實に依るものにして、永續的な現象ではない。

長きに亘つて見れば、ソヴェート聯邦は、例へばケルチにて製せる銹鐵或はマリニョールにて製鍊せる棒鋼を黒海の諸港或はペルシヤ(イラン)を経て世界市場に進出するの機會到來するの恐れは多分に存するから、此の點は舊來の製鐵國の充分に戒心するを要する所である。

資料出所 „Stahl und Eisen.” 55. Jahrg. Nr. 11, S. 304-310. (“Die Russische Eisen Industrie in ihren wirtschaftlichen Entwicklung, von Dr. Haus Hartig.)

蘇聯邦の地下埋藏物富源 石油 蘇聯邦の石油埋藏量は世界第1位にして、其埋藏量は30億噸世界埋藏量の1/3を占む、而も此數字は石油富源の實數に遙に及ばざるものと云ふべく、尙西伯利、極東、中央亞細亞、ヴォルガ河畔、カルムイツコ・サーリスキエ草原及北極圏内には隨所に未調査の地域及未発見の財寶ありと云ふ。

石炭 蘇聯邦の石炭埋藏は世界的には第2位なるも、歐洲にては第1位を占め、其埋藏量は1兆2,000億噸と稱せらる、而も其大半は廣大なるクズネツキー炭田及調査未了のツングツスキー及ペチョルスキー炭田に埋藏せらる、吾人は茲に帝政露西亞の經濟學者が石炭富源を僅に2,300億噸と決定せる事實を指摘せざるを得ず。

泥炭 泥炭資源は革命前には放置せられ全く調査せられたる事無かりしも、今や蘇聯邦の泥炭は電化上局地的最重要燃料の一となれり、其埋藏量は1億4,000萬噸と稱せられ、世界埋藏量の73%を占む。

鐵鑛 革命前の帝政露西亞の鐵鑛埋藏量は僅に30億噸と稱せられたるも近年頗る増加し、今や鐵鑛埋藏量は2,600億噸と云はれ、世界埋藏量の1/2以上を占む。

マンガン鑛 マンガン鑛も亦豊富にして其埋藏量は優に世界埋藏量の3倍に達す英領印度、伯國、金海灣岸、濠洲、米國のマンガン鑛埋藏量を合算するも、其埋藏量は2億7,000萬噸に過ぎざるに、蘇聯邦一國の埋藏量は6億5,500萬噸に達す。

有色金属鑛及其他鑛石 帝政露西亞は銅、亞鉛、鉛、錫其他有

色金屬は之を國外より輸入し居りたるに、此等有色金屬鑛はカラタウ山脈、ジェズカズカン、コウンラド、ボシチエクウル、ハブチエラング及ウラルのボルペンスキー高地其他に多量に發見せられたり。(1) 銅は其埋藏量 1913 年には 62 萬 7,000 噸と稱せられたるに、今や其の埋藏量は 1,700 萬噸。(2) 鉛は 450 萬噸。(3) 亜鉛は 900 萬噸。(4) ニッケルは 70 萬噸と稱せらる。(5) アルミニウム鑛は帝政露西亞には皆無なりしも、今や其の埋藏量は 1,500 萬噸に達する事明となれり。(6) カリウム鹽も革命前には皆無なりしも、今や其の埋藏量は 160 億噸と稱せられ農業上貴重なる鑛石たるカリウム鹽は世界埋藏量の 83% を占む、帝政時代には國外よりの輸入に俟ちたるも、現在にては却て之を國外に輸出しつゝあり。(7) 燐鑛は地質調査及探検の結果其の埋藏量は 164 億噸と判明、世界埋藏量の 60% を占む。(8) 燐灰石鑛は北極圏内不毛の凍土地帯に多く、其の埋藏量は 5 億 3,000 萬噸と稱せらる、蓋し地質學的埋藏量は恐らく 10 億噸を超ゆべしと云ふ。(9) 硫黄は中央亞細亞及沿ボルガ地方に其一大産地發見せられたり。(10) 金の埋藏量は世界第 2 位に位す、蘇政權樹立以來レナ及後貝加爾産金地の埋藏量激增せるのみならず、西伯利、極東、ウラル、パミール、ヤクーツク、高架索及コサツク自治共和國其地に金塊及砂金の一大産地幾十と無く發見せられたり、近き將來に蘇聯邦は金の埋藏量でも將又産金量でも世界第 1 を占むるに至らん、斯くて南阿、加州、荒須加、濠洲等の有名なる産金地も産金量に於て蘇聯邦に第 1 位を讓る事となるべし。(11) 白金鑛業も金鑛業と共に強化發達しつゝあり。

以上最有用地下埋藏物に付述べ、第 2 流的意義を有する貴金屬鑛には觸れざりし處、第 2 流的意義を有する貴金屬鑛はウオルフラム及ラヂウムの發見に一大成果を収めたる以外、他は未だ漸く著手せる程度に止るものと云ふべし、云々。(1935 年 7 月 8 日ブリヤト・モンゴリスカヤ・ブラウダ所載學士院會員ア・デ・アルハンゲリスキー談話要領)

(以上在ブラゴウエスチエンスク、下村領事代理報告)

英國に於ける鐵鋼品輸入關稅引下(商工省貿易局通報第 488 號)

(1) 大藏大臣は關稅諮問委員の勸奨に基き 8 月 8 日以降 5 ヶ月間次記鐵鋼品の輸入稅を從價 2 割(從價 1 割の基本稅を込め)に引下方發令せり。

blooms billets slabs	價格 噸 7 磅 10 志を超へざるもの
bars rods (卷きたる rods) (を除く)	噸 9 磅を超へざるもの
各種型物	噸 5 磅を超へざるもの
girders beams joists pillars	
hoop strip	噸 16 磅を超へざるもの
rails	

(2) 尙次記鐵鋼品に付ても 8 月 15 日より明年 1 月 7 日迄輸入稅を基本稅込め從價 2 割に引下方發令せらる。

板 類	噸 16 磅を超へざるもの
卷きたる rods	噸 9 磅を超へざるもの
barbed wire	
single strand wire	
upholstery and mattress springs	
galvanized hexagonal wire netting	
釘 類	

(東京着昭和 10 年 8 月 8 日在英朝日商務參事官代理來電)

合衆國製鋼業の仕拂ふ税金 (Iron Age, July 18, 1935) 1929 年より 1934 年に至る 6 ヶ年間に合衆國製鋼業の仕拂つた税金は、税金及配當の仕拂を成し得べき純益合計の 1 弗に付 66.4¢ に達した。この事は最近全國製鋼能力の 93% 以上を占むる 26 の主要製

鋼會社が亞米利加鐵鋼協會に提出した資料に依つて明かとなつた。前記の期間に於て上記の諸會社が聯邦、州及地方稅として仕拂つた税金は合計 390,000,000 弗に達したが此の額は前 6 ヶ年間の各年に於て仕拂つた 8 週間分の職工賃銀高と殆ど同じである。この期間中に於て税金及配當を除いた諸費用を仕拂つた後 26 會社が擧げた純益は合計 587,900,000 弗に達した。然し 1930 年後の各年に於ては税金を支拂ふに足る純益を擧げ得なかつた、従つて 433,500 人の株主に對し配當を仕拂ふことも出来なかつた。上記諸會社の鋼材生産高は自 1929 年至 1934 年の 6 ヶ年に於て合計 115,126,000t に達し、これに對し税金額は 1t 當り平均 \$3.39 であつた。製鋼高と收益とが最高記録を作つた 1929 年に於ける 26 會社の鋼材生産高は 34,435,000t で之れに對する税金の支拂高合計約 95,750,000 弗即ち 1t 當り \$2.78 に達した、然るに不景氣のドン底に落ちた 1932 年に於ては缺損の爲め聯邦稅は殆ど支拂はず、州及地方稅として支拂つたのが合計約 52,125,000 弗で鋼材生産高 8,605,000t に對し 1t 當り \$6.06 に達した。1934 年に於ては、税金の仕拂はこれ亦殆ど州及地方稅に止まり合計約 56,230,000 弗で鋼材生産高合計 16,212,000t に對し 1t 當り \$3.47 に相當し 6 ヶ年の平均額を越へた。總賣上高に對し 26 會社が仕拂つた税金は、賣上高が約 2,387,000,000 弗であつた 1929 年の 4.0% を最底とし、賣上高が 689,000,000 弗即ち 71% を減した 1932 年の 7.6% を最高とする。1934 年に於ては賣上高は 1,148,000,000 弗に達し其の 4.9% が税金に仕拂はれた。尙 6 ヶ年間の賣上高總計は 8,180,000,000 弗で其の 4.8% が税金に支拂はれた。1931 年から 34 年にかけては缺損續きで聯邦稅は殆ど支拂はれなかつた。州及地方廳に支拂はれた税金は 1929 年には 59,583,477 弗であつたが 1934 年には 48,541,966 弗に即ち約 19% を減した、尙生産高及賣上高は双方共 50% を減じた。

(M. M. 生)

歐米鐵鋼界近況 (Iron & Coal Trades Rev. July 12, 1935)

1. 合衆國…ピツバーク…7 月初旬の製鋼高は 45 ポイントを回復して生産能力の 36.5% に達した。(昨年同期の作業率は 27%)。自動車工業からの注文で業態は著しく好轉氣運に向つて居る。ユ、エス社 6 月中の鋼材引度高は前月より 20,807t を減じて 578,105t に達し本年上半期の引渡高合計は昨年同期の 3,678,895t に對して 3,553,999t であつた。

2. 佛蘭西…佛蘭西の諸工業就中鐵鋼業者は「出來得る限り外國品を驅逐し以て諸工業に便益を與ふる爲め從來の輸入割當制度を漸次高關稅に代へんとするラヴアル首相最近の提案に對し反對の意を表して居るが特に機械工場は現制度の廢止に依り甚大の打撃を蒙るものと見られて居る。先に露西亞から鐵鋼材、機械其他の大量注文があつて商談進行中の處代金支拂條件に關して折衝纏らず茲當分は成立の見込みはない。鑄物銑の生産及販賣は 7 月末迄はシンヂケートの統制下にあつて、第三號鑄物銑の價格は t 260 法の据置、又へマタイト銑の賣行も可なり良好で價格は堅調を持して居る。一方製鋼業は依然として政府の注文に依存して居るが若し此の注文にして杜絶せんか、多くの工場は閉鎖の止むなきに至らう。長らく止まつて居た民間からの注文はシンヂケートの更新と共に復活するものと見られて居る。7 月初旬の市場には別に變化なく棒鋼市場の軟弱はマーチン及特殊鋼の需要増に依つて幾分償はれた。ヂョイストの市場も弱氣配で 1 年前とは比べものにならない。シンヂケートは從來通り向ふ 4 ヶ月間其の機能を行ふことになつて居るので價格に變化はないものと見られる。厚板及中板は賣行良好で厚手薄板の

市場も亦堅調を保持して居る、シンデケートに於ては自由市場に置かれてある薄手薄板の壓迫あるにも拘らず目下の處何等の調節も行つてゐない。屑の輸出貿易は非常に活潑で可なりの數量が高い値段で白耳義に輸出されてゐるが國內取引は極めて閑散である。

3. 白耳義……鐵鋼市場は極めて靜穩で今の處好轉の望み薄である。一方輸出貿易の沈滞は獨逸が物々交換の取引を擴大せると、數ヶ月前極東方面に對し大量の取引が行はれたことに原因するものである。極東方面には目下大陸品のストックが堆積するものと見られ同方面からの注文は至つて稀である。對英貿易は英國の大陸鋼カルテル加入問題の條件成立に伴ひ近く好轉するものと見られて居る。銑鐵市場は閑散で第3號鑄物銑の價格は國境渡370フラン、ヘマタイト銑は爐渡425フラン、半含磷銑は爐渡370フラン、鹽基性銑鐵は引渡し330フランの相場である。因に露西亞の銑鐵は硫黄分高き爲め鑄鋼用に適さない、Saporosj 工場では輸出用銑鐵の品質を改善したと公表する所あつたが然し伊太利、スペイン、丁抹、南米等の買手は規格に合はないと云ふ廉で最近露西亞銑の引渡を拒絶した。故に輸出業者は露西亞への返送運賃を省く爲め屑として是を賣捌いたと云ふことである。半製品に就ては、獨逸が伊太利から物々交換で半製品の注文を新に受注したとの報道を受け白耳義側では種々對策を講ずる所あつた。對外貿易は依然として沈滞氣配にあるも然し對英取引は幾らか好轉の氣配に在る。鋼材に關しては棒鋼及デ

ョイストの新取引は殆どない。今の處鋼材の需要僅少なる爲め工場では再び生産減の必要に迫られて居る。鋼板市場も亦惰氣滿滿である。

4. 獨逸……6月の鐵鋼國內取引は前月に比し著しい變化はなかつたが季節的沈滞は例年に比しきほどでもなかつた。銑鐵の産額は減したが鋼産額は前月より増加した。對外取引は會計年度の終りである6月30日以前に於て國際カルテルの割當を完了せんことに努めたが爲め6月中旬頃には著しい増加を示した。國際チューブカルテルの崩壊以來英國のチューブ製造業者と獨逸のチューブシンデケートの間に成立せる相互保護協約は6月末で期限満了の筈であつたが協約の有効期間は更に向ふ3ヶ月間延長さるゝことゝなつた。其他の大陸チューブ團體は此の協約に直接關係はないが然し彼等は其の一般政策を實行に移すであらうと信ぜられて居る。瑞典の鐵鑛採掘會社とウェストファリアの製鐵會社間に締結された契約期間は6月末迄であつたが之れ亦10月末迄延長された。獨逸と瑞典間に清算契約が締結されない以前に於ては瑞典鑛石の引渡高は月平均420,000tに達したが契約成立以來月402,000tに減じた。ヅセルドルフのワイヤシンデケートはブラッセルの國際ワイヤ製品輸出シンデケート(Iwe Co.)の期間と同一ならしむるため1935年12月から向ふ1ヶ年延長さるゝことゝなつた。(M. M. 生)

主要製鐵所に於ける昭和10年7月分鐵鋼材生産高調 (單位噸) (商工省鐵山局)

種 別	7 月 分			累 計			%
	昭和10年	昭和9年	増 減	昭和10年	昭和9年	増 減	
銑 鐵	175,923	157,947	17,976	1,222,184	1,106,388	115,796	10.5
普 通 鋼	49,246	28,886	20,360	349,158	259,320	89,838	34.6
販賣向鋼片	367,647	294,178	73,469	2,615,752	2,115,823	499,929	23.6
販 賣 向	12,854	—	12,854	40,883	—	40,883	—
シ ー ト	6,714	4,384	2,330	68,202	49,912	18,290	36.6
バ ー	6,017	—	6,017	12,380	—	12,380	—
鋼	22,222	7,700	14,522	127,950	83,149	44,801	53.9
鍛 鋼	668	—	668	1,152	—	1,152	—
壓 延 鋼 材	4,982	5,144	△ 162	33,830	37,388	△ 3,558	9.5
	273,205	243,504	29,701	2,060,912	1,744,114	316,798	18.2
	1,348	—	1,348	1,697	—	1,697	—
普 通 鋼 壓 延 鋼 材 内 譯							
厚 0.7 耗 以 下 の 鋼 板	30,658	24,178	6,480	207,353	173,032	34,320	19.8
其 他 の 鋼 板	50,550	52,140	△ 1,590	414,126	355,319	58,807	16.6
錳 力 板	7,979	4,578	3,401	54,982	27,697	27,285	98.5
棒 鋼	70,496	57,626	12,870	532,996	427,384	105,612	24.7
形 鋼	654	—	654	1,003	—	1,003	—
軌 鋼	30,984	40,481	△ 9,497	277,320	244,088	33,232	13.6
線 鋼	30,369	26,954	3,415	207,220	206,329	891	0.4
其 他	694	—	694	694	—	694	—
	32,403	24,192	8,211	236,342	212,872	23,470	11.0
	15,496	10,554	4,942	102,248	73,764	28,484	38.6
	4,270	2,801	1,469	28,325	23,629	4,696	19.9

備 考 △印は生産減を示す。

昭和10年6月中重要生産月報抜萃 (商工大臣官房統計課)

品名	生産額	6月中	前月中	前年同月	1月以降累計	
					昭和10年	昭和9年
金	(gr)	1,638,534	1,526,252	1,164,142	8,610,040	6,971,805
銀	(gr)	22,140,020	21,475,025	17,324,627	121,589,289	103,876,036
銅	(kg)	5,534,636	5,824,505	5,676,051	34,589,425	33,406,723
鉛	(kg)	592,836	622,132	590,700	3,441,778	3,359,289
鉛	(kg)	2,403,975	2,593,741	2,332,975	14,923,558	14,492,928
錫	(kg)	201,462	143,948	78,693	900,035	467,126
硫	(t)	12,802	12,793	10,117	72,049	57,142
鐵	(t)	99,209	100,077	85,428	618,818	530,134
化	(t)	445,254	466,093	399,319	2,534,107	2,508,960
七	(t)	72,118	70,393	74,672	436,017	374,030
硫	(t)	2,707,038	2,958,448	2,648,897	17,275,786	17,102,834
石	(100T)	228,507	244,313	190,806	1,514,554	1,065,806

昭和10年外國銑輸入高表 (單位噸)

(銑鐵共同販賣會社)

月次	輸 出 國 名						其 他	計
	印 度	英 國	獨 逸	米 國	瑞 典	露 國		
1	25,340	102	—	204	5	—	17,876	43,534
2	24,737	203	—	—	—	—	14,835	39,075
3	26,934	203	102	15	605	—	14,148	42,007
4	13,946	102	125	—	—	—	19,721	33,921
5	19,879	91	—	211	—	—	44,730	64,911
6	19,724	51	—	—	—	45,938	6,303	72,016
7	26,312	208	—	205	—	37,887	8,484	73,096
計	156,179	960	254	635	610	83,826	126,097	368,560

鑛物並鑛業用品相場表

(大阪市場及京城相場金屬鑛非金屬鑛地金鑛業用品)

品 名	單位	標準品位	值 段	品 名	單位	標準品位	值 段	品 名	單位	標準品位	值 段			
金 屬 鑛				黑重	鉛 (土狀)	噸	80%(原鑛)	42'00	削粉	亞鉛	100斤	京城相場	46'00	
水重滿	鉛	鑛	噸	90%以上	2,400'00	錫	95%	26'00	末	亞鉛	70kg	8'20		
	僂 (二酸化)	鑛	噸	70%以上	23'00	石	33番	10'00	達	灰曹	噸	11'00		
		鑛	噸	80%	72'00	石	上並	20'00	重	曹砂	50kg	25'00		
		鑛	噸	70%	40'00	麥	上並	12'00	礪	砂	噸	4'40		
		鑛	噸	60%以上	18'00	苦	上並	12'00	硫	化曹	27kg	4'60		
	(金屬)	鑛	噸	40%以上	0'50	土	上並	6'00	珪	曹加	30kg	58'00		
	(炭)	鑛	噸	40%以上	20'00	珪	上並	10'00	青	里達	112封度	57'00		
滿	僂	末	100斤	80%	6'50	石	上並	5'00	樟	化曹	50kg	95'00		
ク	ローム	鐵鑛	%	70%	4'50	赤	白珪	8'00	油	赤油	噸	80'00		
安	質母尼(精製)	鑛	噸	40%以上	1'00	砂	珪	1'60	B	油	噸	70'00		
		鑛	噸		750'00	砂	(天然)	11'00	油	藍色	噸	65'00		
	(硫)	化	噸		550'00	硫	黃	71'00	油	油	噸	39'00		
亞	鉛	鑛	%	40%以上	1'00	地 金								
鉛	水	鑛	噸	50%	50'00	銅	(水曜會建值)	100kg	74'00	(鑛業誌其他より抄録せり)				
水	硫	鑛	噸	5%	10'00	錫	ツケ	噸	357'00	亞	錫	鉛	噸	391'50
硫	赤	鑛	噸	45%以上	5'00	鉛	鉛	噸	31'75	鉛	鉛	噸	24'50	
赤		鑛	噸	65%以上	16'00	アル	ミニウム塊	噸	170'00	99%				
非 金 屬 鑛				鑛 業 用 品										
石	綿(内地)	噸	100'00	水	硫	銀	100斤	388'00						
盤	(滿洲)	噸	450'00	酸	(55)	酸	噸	7'50						
	石	噸	39'00	(65)	砂	砂	100斤	8'50						
		噸	95%	砒	砒	砒	噸	13'50						
		噸	90%	亞	鉛	末	噸	23'00						
		噸	85%	硝	性	力	100封度	9'20						
		噸	80%	苛	性	力	100封度	23'00						
		噸	75%											
		噸	70%											
盤	石	末	100斤	5'00										
黑	鉛(鱗狀)	噸	85%(原鑛)	—										

内外最近刊誌參考記事目次

Iron Age, No. 24-26, June, 1935.

- Zinc amm. chloride; Its place in modern galvanizing. H. G. Hobbs. No. 24, p. 23.
- The use of metals in automotive Transportation. J. M. Watson. No. 24, p. 31.
- Hot strip steel rolled on Steckel-Type mill. No. 26, p. 13.
- A. S. T. M. investigates Hardness Testing and Creep of Alminum alloys. No. 26, p. 21.

Iron Age, No. 1-3, July, 1935.

- Analysis of design and construction of Hot Blast stoves. A. Mohr. No. 1, p. 12.
- Electric arc welding Bronze overlays on to steel. C. H. Jennings. No. 1, p. 22.
- Light waves in Precision Measuring. E. W. Melson. No. 2, p. 14.
- Practical aspects of the maintenance of carbide milling cutters. F. W. Curtis. No. 2, p. 16.
- New method of heat-treating rails. J. Brunner. No. 2, p. 20.
- A. S. T. M. committees report corrosion and metallographic data. No. 3, p. 23

Archiv für das Eisenhüttenwesen, Juli, 1935, Heft 1.

- Die oolithischen eisenerze im Doggersandstein der Fränkischen Alb. Erust Schmidtil. S. 1.
- Ueber Vorgänge im Walzspalt, besonders über die Lage der Fliess scheide und die grösse der Voreilung beim Walzen. Theodor Dahl. S. 15.
- Grundlagen, Entwicklung und Beispiele feuerungstechnischer Berechnungen. III. Teil: Grundlagen und Aufbau der Formeln zur Berechnung der von den Verbrennungsgasen im Ofen abgegebenen Wärme. Hellmuth Schwiedessen. S. 23.
- Einfluss von Hohlkehlen an obgesetzten Wellen auf die Biegeewecksefestigkeit. Ernst Lehler. S. 31.
- Die Weiterentwicklung witterungsbeständiger stähle. Karl Daeves. S. 37.
- Rosten und Zundern von Baustählen unter Zugbeanspruchung. E. W. Müller. S. 41.
- Die Arbeiten von F. Regler zur Werkstoffprüfung mit Röntgenstrahlen. S. 47.
- Beitrag zum System Eisen-Phosphor-Sauerstoff. Hanns Wentrup. S. 57.
- Die Mittelrippe in Martensitnadeln. Erich Scheil. S. 61.
- Die Organisation des Terminwesens auf Hüttenwerken, besonders Walzwerken. I. Teil: Vorbetrachtung und Organisationsgrundlagen. Gottfried Schmidt. S. 63.

Stahl und Eisen, Heft 29, 30, Juli, 1935.

- Ueber die Bauart und Anwendung des kernlosen Induktions ofens im Elektrostahlbetrieb. F. Pölz guter. S. 773.
- Zur Normung einer kleinen Kerbschlagprobe. R. Mailauder. S. 779.
- Der einfluss einiger Kalibrierungsarten auf das Entstehen von Druckfaltungsrissen bei Walzstäben. Hans Cramer. S. 797.
- Vorschlag zur Rohstahlerzeugung im Hochhafen und zur Verhüttung saurer Erze nach einem Verbundverfahren. M. Fränkl 805.

Die Giesserei, Heft 15, Juli, 1935.

- Ueber den einfluss von Verbeanspruchungen auf die Festigkeiteigenschaften von Gusseisen. A. Leon und A. Slattenschek. S. 353.
- Wichtige Daten für die Hartgusserzeugung unter besonderer Berücksichtigung des Hartwalzengusses. H. Bocek. S. 357.
- Schutz gegen Bodenerschütterungen in Giessereien. W. Gerb. S. 364.

Die Geesserei, Heft 16, 2. Aug. 1935.

- Elektrisch geschweisster temporguss und seine nachbehandlung. Th. Tilemann. S. 377.
- Herstellung eines Zylinderdeckels ohne Verwendung von Kernstützen. F. Vogelsang. S. 387.
- Rechte und Pflichten des Betriebsführers. Franz Goerrig. S. 391.
- Zur Frage des Rechnungswesens in Kundengiessereien. Erich Becker. S. 387.

(鈴木)

Zeitschrift für Metallkunde, Mai 1935.

- Das Sonderverhalten des Elastizitätsmoduls ferromagnetischer Werkstoffe. M. Kersten. S. 97-101.
- Ueber die Rekristallisation von Silber verschiedenen Rein-

- heitsgrades. E. Osswald. S. 101-104.
 - Die Härte gespritzter Metallschichten. Dr. Kessner, Th. Everts. S. 104-107.
 - Ein photometrisches Schnellverfahren zur Bestimmung des Siliziums in Leichtmetallen. H. Pinsl. S. 107-114.
 - Die Herstellung dünner Drächte durch Erstarren flüssiger Metallstrahlen. G. Tammann. S. 114-115.
- The Foundry, May 1935.
- Extends apprenticeship training plan. F. G. Steinebach. p. 18-20.
 - Canadian make convention Plaws. p. 21.
 - Small acid open hearth furnace has capacity of one half ton. J. Trantin. p. 22.
 - Malleable cast iron. D. P. Forbes. p. 23.
 - Melt metals with natural gas. P. Dwyer. p. 24-26.
 - Gray cast iron. J. W. Bolton. p. 27-30.
 - Prevent porosity in fly wheel hubs. J. H. Easthom. p. 31.
 - Make iron castings in steel shop. W. F. Rose. p. 32
 - When a good salesman says no. E. N. Simons. p. 33.

Metal Industry (New York) April, 1935.

- Indicating pyrometers are profitable in the metal industry. M. D. Pugh. p. 117-119.
- Making strong brass and making brass strong. M. G. Corson. p. 120-121.
- British Institute of Metal Meeting. p. 122-124.
- Testing Materials Society Meeting. p. 125-126.
- Why metals strain the skin. C. M. Hoke. p. 127-128.
- Electrochemists at New Orleans. p. 129-130.
- A plater's guide to solution concentrations. H. W. Faint. p. 131-132.
- Dropping tests for electroplates. R. O. Hull, P. W. C. Strausser. p. 133-134.
- Metal products manufacturing company 100 years old. p. 135.

Metal Industry (New York) May, 1935.

- Spinning sheet metals. W. B. Francis. p. 155-158.
- Beating troubles. A. H. Levy. p. 159.
- Making strong brass and making brass strong. M. G. Corson. p. 160-161.
- Direct rolling of brass. W. A. Wood. p. 162.
- Non-ferrous scrap metals and melting practice in the Washington Navy Yard. M. W. von Bernewitz. p. 163-164.
- Newark platers hold big annual meeting. A. K. Graham. p. 164.
- Silver plating to specifications. C. B. F. Young, S. G. Taormina. p. 165-167.
- The anodic coating of aluminum. H. K. Work. p. 168-170.
- Electric bright annealing. p. 171.

Metal Industry (New York) June, 1935.

- Electro-platers will meet in Bridgeport. p. 193-199.
- Master Electro-platers' Institute. p. 200-201.
- Early silver plating in America. W. G. Snow. p. 202-205.
- Reminiscences of a plater's kid. R. W. Tillotson. p. 206-208.
- Chromium plate on sewing machine parts. F. B. Jacobs. p. 209-300.
- A brass foundryman's progress. O. Gerline. p. 211-212.
- Monel Metal for pickling equipment. p. 213.

(中野)

金屬 第5卷 第8號 昭和10年8月1日

- 大形鋸鑄爐に就いての一考察 鶴瀨 新五 (327)
- 鑄物の結晶粒 南波 榮吉 (333)
- 金屬材料學の立場から見たアルミニウムの製鍊 大日方一司 (339)

- 高壓高速用軸承合金 ケルメットに就て 岩崎 巖 (346)

朝鮮鑄業會々報 第152號 昭和10年8月1日

- 朝鮮産合金硫化石英脈中の各鑄物生成關係及特に硫砒鐵鑄に伴ふ自然金の正體に就いて 山口 定 (8)

商工省貿易局通報 第453號 昭和10年8月10日

蘭印に於ける鐵鋼輸入制限

商工省貿易局通報 第454號 昭和10年8月10日

英國鐵鋼筒管類其の他に對する輸入稅改正

鑄物 第7卷 第8號 昭和10年8月10日

- ドロップハンマー・アンビルブロックの鑄造工事に就て 海軍艦政本部 (499)
- 廿五噸鋸鑄爐の設計に就いて 山本 光男 (502)

- 動力** 昭和10年8月10日
 原子核破壊用電源 仁科 芳雄 (1)
 製鐵事業とコークス工業 黒田泰造、伊能泰治 (14)
- 日立機械評論** 第21號 昭和10年7月15日
 アルミニウム及其合金の防蝕法 篠原 立 (31)
- 商工省貿易局通報** 第457號 昭和10年8月12日
 英國當業者の國際鐵鋼カルテル加入問題
- 日本ニッケル技術彙報** B-4
 酸性平爐に依るニッケル合金鋼の精鍊 藤原 唯義 (全卷)
- 朝鮮鑛業會誌** 第18卷 第2號 昭和10年6月15日
 滿洲朝鮮の地質鑛床の特異性に就て 加藤 武夫 (69)
 平安南道江西郡の所謂長石及磁土 波多江信廣 (81)
- 日本ニッケル作業指針** C-7 昭和10年8月10日
 ニッケル合金鑄鐵鑄造法 百々 初男 (全卷)
- 電氣製鋼** 第11卷 第8號 昭和10年8月15日
 熱源としての電弧に就て (其の二)
 林 達夫、野田 浩 (417)
 鋼の調質後に生ずる割れ疵に就て 盤城 恒隆 (427)
- 住友電線彙報** 第6號 昭和10年7月25日
 亜鉛鍍金線の龜裂 橋本 誠一 (51)
- 採鑛冶金月報** 第13年 第8報 昭和10年8月15日
 紫鑛利用法の經劑的價値に就て 渡邊 俊雄 (203)
 銅沈澱劑としての紫鑛の利用に就て 高島 正 (214)
 特越 鑛山 (219)
- 海外經濟事情** 第15號 昭和10年8月10日
 ガルフコースト石油業概観 (昭和10年6月1日附
 在ニューオラルレアンス帝國領事代理佐藤由巳報告) (74)
- 機械學會誌** 第38卷 第220號 昭和10年8月1日
 三菱特許合金アームス・ブロンズの要 朝戸 順 (561)
- 九州鑛山學會誌** 第6卷 第1號 昭和10年7月31日
 南洋鑛產地視察談 木下 龜城 (1)
 ロープの撚方に就て 香月 五郎 (30)
 浮游選炭に關する二三の實驗 鹽谷 勳 (38)
 國產軌條に就て 足立 逸次 (47)
- 製鐵研究** 第143號 昭和10年6月30日
 固定式鹽基性60 噸平爐に於ける低炭素鋼出鋼前後の
 銹鋼の組成變化に就て 木原 克己 (291)
 球狀セメントタイト組織を呈する高炭素鋼の窒化に就て 田澤敏次郎 (297)
- 資源** 第5卷 第9號 昭和10年9月1日
 資源保存の意義 (1)
 ソウェート聯邦に於ける製鐵業の發展 (15)
 佛蘭西石油政策の趨勢 (59)
 生産及貿易より見える世界のアルミニウム及ボーキサイト (84)
- 金屬の研究** 第12卷 第7號 昭和10年7月20日
 圓棒棒の反磁場係數に就いて 仁科 存 (315)
 マグネシウム合金の腐蝕 (第4報) マグネシウム
 三元合金の腐蝕試驗 森岡 進 (322)
 金屬セメンテーション (第5報) クロムに依る
 セメンテーション 加瀬 勉 (357)
- 東京工業大學々報** 第4卷 第8號 昭和10年8月10日
 窯業製品の所謂高温荷重能力に關する一考察
 近藤清治、鈴木信一 (529)
- 商工省貿易局通報** 第488號 昭和10年8月23日
 英國に於ける鐵鋼品輸入關稅引下
- 土木學會誌** 第21卷 第8號 昭和10年8月25日
 測量器の改良に關する一考察 安東 功 (1,095)
 水道管に於ける水衝壓に就て 池田篤三郎 (1,101)
 鑄鐵管に於ける流量に就て 島崎 孝彦 (1,165)
- 外務省通商局日報** 第193號 昭和10年8月27日
 石炭移輸入状況 (1,240)
- 日立評論** 第18卷 第8號 和和10年8月25日
 工業には實地の修業が大切である
- 骸炭消火車牽引用16 噸電氣機關車 小栗 定一 (19)
- 日本鑛業會誌** 第51卷 第604號 昭和10年8月22日
 Reducing the Weight of Mine Equipment with
 increased Safety and Economy
 By James A. Rabbitt (453)
 黃鐵鑛、黃銅鑛、磁硫鐵鑛、方鉛鑛及び閃亜鉛鑛の浮選
 に於ける鑛液の水素イオン濃度及び各種化學試薬添加の
 影響 山田 賀一 (467)
 摩擦係數の大きさが搖種式切羽運搬機樋上の石炭の運動に
 及ぼす影響 岡田丈五郎 (476)
- 燃料協會誌** 第14年 第155號 昭和10年8月20日
 北海道に於ける石炭鑛業の現状 藤井暢七郎 (912)
 樺太炭の液化工業に就て 福永 勉 (938)
 鐵と石炭 黒田 泰造 (954)
 輝炭、暗炭等の選別に就て 高桑 健 (959)
- 外務省通商局日報** 第195號 昭和10年8月29日
 蘇聯邦の地下埋藏物富源 (1247)
 珐瑯鐵器及鑄物類輸入業者 (スラバヤ) (1248)
- 研究報告** (三菱重工業名古屋航空機製作所) 昭和10年8月20日
 タハード鋼の燒入法に依る抗力の相違 石澤命知、尾形康夫 (1)
 齒車用鋼の比較 (其の二) 石澤命知、尾形康夫 (17)
 高 Ni-Cr-W 鋼の加熱 關口 次郎 (30)
 松村式硬度計及び之れと各種硬度との關係 矢野 勝 (38)
- 金屬の研究** 第12卷 第8號 昭和10年8月20日
 酸化チタニウムの熱化學 (第1報) 水素による TiO_2 の
 還元平衡 (砂鐵、第41報) 那須 信行 (371)
 硫酸亜鉛の水溶液より亜鉛を電着せしむる場合の
 分極電位差に就いて (其の3) 石原富松外2名 (381)
 金屬セメンテーション (第6報) 珪素に依る
 セメンテーション 加瀬 勉 (397)
- 大日本窯業協會雜誌** 第43集 第513號 昭和10年9月1日
 繩絞土器に就て (第2報) 再加熱に因るアルミナ及
 酸化鐵の鹽酸溶解度の變化 近藤清治外2名 (1)
 混合ポルトランドセメントの研究 (第14報)
 モルタルの膨脹收縮性と耐水耐鹼性との試験 永井彰一郎外2名 (12)
 耐火原料 (第2回) 關 皓之 (41)
- 外務省通商局日報** 第196號 昭和10年8月30日
 山東諸工業近況 (1249)
- 滿洲技術協會誌** 第12卷 第77號 昭和10年8月
 滿洲國鑛業法に就て 赤瀨川安彦 (519)
 「地之り」と化學成分 坂本 峻雄 (521)
- 銲接協會誌** 第5卷 第4號 昭和10年8月25日
 特殊鋼板の電氣銲接に就て 木下 秀雄 (209)
 薄板 (1.5~6 耗) V 型接手電氣銲接に於て生ずる歪と
 假補強材との關係に就て (II) 美馬源次郎 (220)
 電氣銲接用直流發電機の研究 (II) 岡本 越外2名 (225)
 銅及び銅合金の電氣銲接 (第III報) 岡本 越外2名 (242)
- 工業雜誌** 第71卷 第897號 昭和10年9月1日
 萬年筆の製造法 本間 光長 (402)
 輕金屬合金の語 (406)
 骸炭消火車 (415)
- 電氣評論** 第23卷 第9號 昭和10年9月1日
 銲接用直流發電機の實驗的研究 岡本 越外2名 (901)
 簡單なる電機器に流入する近似周波數電壓電流波群の
 測定に就て 熊澤 尙文 (905)
 電氣材料としてのC合金線 西村啓造、小松原嶽次郎 (939)
- 工業雜誌** 第71卷 第897號 昭和10年9月1日
 萬年筆の製造法 本間 光長 (402)
- エンヂニアリング** Vol. 23, No. 9 昭和10年9月1日
 新型衝擊試驗機 横山 武人 (343)